

1.

静しずかが自殺する。

わたしがそれを知ったのは、静本人から送信されてきた一通のケータイメールでだった。

『風へ』

突然だけど、あたし、死ぬことにしたの。

理由は言わない。遺書とかも遺してないし、誰にも自殺するってことは言っていない。今、このメールを読んでる風以外は。

今、学校の屋上にいるの。風が強くて、とっても寒い。マフラー持って来たらよかったかな？ でも、飛び降りるのに、邪魔だよな？

風にはいろいろ感謝している。本当にありがとね。

それじゃあ、バイバイ

『静』

そのメールを受け取ったのは、穏やかな日曜日の朝、自宅のリビングで家族と一緒に朝食を食べているときだった。テレビからは中身のない情報バラエティが流れてきていて、そ

れをなんとはなしに見ていた。ケータイが鳴って、齧りかけのトーストをそのままにして、ケータイを開いた。行儀悪い！とお母さんが叫んでる。

最初、そのメールの意味が分からなかった。記されている文章は読めるのに、それが頭の中で意味を為さなかった。文面を何度も何度も読み直すうちに、ようやくおぼろげながら意味が分かってきた。正直、静の悪ふざけだと思った。でも、静はそんな悪戯いたずらをするような子じゃない。おとなしい、控えめな静が、たとえ親友に対してとはいえ、こんなメールを送れるなんて思えない。

なにより、直感が告げていた。このメールは、本物だと。そう思ったとき、居ても立ってもいられなくなった。

「ごめん、ちよつと出てくる！」

両親に向かってそう叫ぶと、自分の部屋でダウンジャケットをつかみ、慌てて外に飛び出した。

一月の朝、白い息を吹き出しながら、わたしは学校に向かった。

「静、静、静……！」

静、本当に死ぬの？ 自殺しちゃうの？

走りながら、静のケータイに電話をかけるけど、一向に繋がる気配はない。無情な呼び出し音が、延々と続く。

はじめて訪れた休日の学校は、とても静かだった。学校ってこんなに静かなものだったっけ、と思う。そこは静寂しじまに支配されていた。普段の喧騒がまるで夢のよう。どうせなら、こつちが夢だったらいいのに。

「静っ！」

その静寂を私の声が切り裂いた。でも、静からの応答はない。

休日なので、当然校門は閉まったままだ。わたしは校門に手を掛け、スカートが翻るのも構わず、勢いよく飛び越える。着地して、走り出そうとしたとき、ケータイが鳴った。

『風、そんなに慌てて校門飛び越えたら、スカートの中、見えちゃうよ』

受話器越しに聴こえてきたのは、か細くて、綺麗な声。

ふたつぎやか  
式月静の声。

「静っ？ 今どこに」

『屋上を見てみて』

はっと、屋上を見上げる。

冬の灰色の空。

黒くて長い髪が風にたなびく。制服の短いスカートが揺れている。

静は、屋上のフェンスを越えて、幅の狭いところに立って

いた。

普段の、おどおどとした立ち振る舞いからは想像できないほど、静は屹然としていた。あの怖がりの静が、あんなところに堂々と立っているなんて、信じられなかった。

「危ないよ、静。降りてきなよ」

私は泣きそうな声で言った。事実、泣いていたのかもしれない。自分で分からないほど、頭は混乱していた。

それほどの悲愴感を、静から感じたから。

冬の冷たくて乾いた風が吹き荒ぶ。容赦なく。

『……』

静はそれに応えなかった。私が震える足に鞭をいれ、静のほうに歩み寄ろうとした時。

『バイバイ』

短く。

静の口から別れの言葉が告げられた。

2.

静が屋上から飛び降りた後、わたしはすぐさま警察に連絡し、救急車を呼んだ。

落ちた静を、直接この目で見ることは出来なかった。それ

は静の死を完全に認識することだから。それに、静の綺麗な顔が汚れているのを見る勇気が、わたしにはなかった。

静は即死だった。

死因は脳挫傷<sup>のうざしやう</sup>。校舎の高さ程度からの飛び降りでは、生存することもある、ということは聞いたことがある。しかし、それは当たり所……いや、落ち所というべきか、それが良かったときの場合。静は頭の中から地面に激突したらしい。いくらなんでも、それでは助かることは不可能だった。

あの怖がりで、臆病な静が。自分の意思で、頭から地面に突っ込んだ。

いったい、どういう心境に陥れば、そんなことが出来るようになるのか。わたしには想像も、つかない。

静が亡くなった二日後、通夜が催された。既に静の死は全校集会で全学年に知らされていたので、同級生を初めとしてたくさんの人が静に別れを告げに来ていた。もつとも、この中で本当に静の友達と呼べる人は少ない。いや、いないと言っても過言ではない。おそらくわたしが、唯一無二の親友だったのだ。

今お焼香を挙げている人たちは、この場では泣きはしているものの、時間が立てば静のことを忘れてしまうだろう。中には、無表情で、静の遺影に向かって小さくお辞儀をするだ

けの人もいた。彼らにとつて、静は本当にただのクラスメイトでしかないのだ。

静が自殺した理由は、全く以つて分からなかった。遺書も、なあんにもものこっていない。静は、名前通り物静かで、クラスの中でも目立つことはなかったけど、いじめられているなんてことはなかった。自殺する理由なんてないはず。

……静、どうして。

どうして、死んじゃったの？

気づくと、お焼香が私に回ってきていた。ゆっくりと歩を進める。静のお父さんとお母さんが頭を下げていたが、私の姿を認めると、顔をくしゃつと歪めた。

「凧……ちゃん……」

お母さんが言葉に詰まる。たった一人の娘を、自殺という形で亡くしてしまったのだから、無理もない。お父さんの方は無理をして、涙を堪えているように見えた。喪主として、責任を果たすように。

「どうして……静は……」

お母さんのその問いに、わたしは答えられない。答える術を持っていない。

「静……いじめられていたの……?」

「いえ、そんなことは」

ないはずだ。なかつたはずだ。あのクラスで、イジメなんて。しかし、わたしはお母さんに対して、そう言い切れない。

「凧ちゃん……おねがい……おばさん、真実を知りたいの……」

「すいません、わたしにも——分からないんです」

「うそ、凧ちゃんなら何か知ってるはずよ。だって、静が最後に連絡した唯一の人だもの……」

確かにメールは来た。電話も来た。それはわたしが静の唯一の親友だったからで——。

もしかして、他意があるのでは——？ あの連絡には、わたししか気づけない、何かが含まれていたのでは？

「ねえ、おねがい、凧ちゃん！」

おばさんの声がだんだん荒立っていく。今にもわたしに掴みかかろうとしたとき、おじさんがおばさんの両肩を抑えた。

「凧ちゃん、すまんね」

「いえ」

そう言うおじさんの両肩も震えている。わたしは静かにお焼香を上げて、その場を後にした。

冬の夜の帰り道。重い足取りで、自宅へと向かう。

『凧ちゃん……おねがい……おばさん、真実を知りたいの……』

『うそ、凧ちゃんなら何か知ってるはずよ』

さっきのおばさんの悲痛な声が、脳裏にこべりつく。わたしだって、静が自殺した理由が知りたい。

どうして、静は死ななければいけなかったのか。

どうして、わたしにだけメールを送ってきたのか。連絡をしてくれたのか。

どうして、わたしの目の前で——。

ぎり、と奥歯をかみ締めた。悔しくて。歯痒くて。

夜空を仰いだ。冬の空の、澄んだ星空が綺麗で。

一滴、瞳から頬に流れた。

涙はこれで最後にしよう。

もうどんなことをしても、静は戻ってこないんだから。せめて、静が死んだ理由を解き明かそう。

わたしは、この夜空に誓った。

3.

通夜の翌日の葬儀には出列しなかった。ご両親が、学校関